

頻出問題というわけではありませんが、比較生産費説以外の理論について説明します。

チャレンジ問題

国際貿易理論に関する次の文章の A、B に入る語句の組み合わせとして妥当なのはどれか。「ヘクシャー・オリーンの定理によれば、国際貿易は国と国との間で (A) に差異があることから発生する。

リプチンスキーの定理によれば、ある国が資本と労働を用いて資本集約的な財と労働集約的な財の 2 種類の財を生産している場合、財の価格が不変のままですその国の資本が増加した場合には、(B)」

A	B
1. 生産技術	資本集約的な財の生産は増加し、労働集約的な財の生産は減少する
2. 生産技術	両財の生産は共に増加するが、資本集約的な財の増加率の方が大きい
3. 生産技術	資本集約的な財の生産は増加するが、労働集約的な財の生産の増減は不明である。
4. 生産要素の賦存量	資本集約的な財の生産は増加し、労働集約的な財の生産は減少する
5. 生産要素の賦存量	両財の生産は共に増加するが、資本集約的な財の増加率の方が大きい

(国税専門官 改題)

リカードの比較生産費（比較優位説）では生産の効率性に着目し、比較優位のある財に特化して生産を行い貿易を行うものでした。

それに対し、ヘクシャー・オリーンの定理は、その比較優位が起きる原因に注目することになります。

この定理に基づけば、各国は、相対的に豊富にある生産要素を集約的に用いる財を輸出することになります。例えば、A 国に資本財が相対的に豊富にあれば資本財（例えば、自動車）を輸出し、労働が相対的に豊富な国は労働集約的な財（例えば、綿花）を輸出するという考え方になります。

ただし、レオンチェフの逆説（レオンチェフ・パラドックス）という主張もあって、実際に観察されたものによると資本財が豊富にあるアメリカが工業製品など資本集約的な財を輸出しているのではなく、労働集約的な農産物などを輸出していたという結果が見られました。

さらに、リプチンスキーの定理ですが、これは、もし資本と労働とが同じ量あった場合、右のようなプロセスに従えば、資本のみが増加すると、資本集約的な財の生産が以前より拡大する（労働集約財の生産は減少する）ということです。

したがって、これらの説明にあてはまるのは4が正解になります。

